

◆此の頃は、気候変動や大気現象、猛酷暑など、聞きなれない言葉の多い天気予報に一喜一憂しながら、不要の外出を慎んでいる。各地での豪雨で被災された多くの方々のご苦勞を思うと、少しばかりの不自由など物の数ではない。世界の何処かで起こる風雨の災害など報道されているテレビを見ながら、何となく空の色や雲の流れは秋の天候に刻々と移ってゆくのを感じる。いつになったらコロナが終息するかと、根比べになりそうな予感もしている。

市川茂子

◆一九四三年生まれの私は、疎開した宮城県の上里で育った。文化的なものが周囲に無い中で、兄について男の子たちの中で遊び、木に登ったり飛び降りたりが楽しかった。中学、高校と軟式テニスをし、インターハイ出場は当然と思っていたが次第にコート上での対戦相手との心理的駆け引きが苦しくなり、球技は向いてないと感じた。高卒で働き始めた一九六〇年代半ばスキーブームが興り、一般人は自家用車を持たぬ時代に、日曜ごとに長いスキーを担ぎバスや電車を乗り継いで仙台から蔵王へ通った。スキーという二本の板を一人で、自分の身体能力と調和させ乗りこなしていくのが楽しかった。友人と比べても我ながら進歩が速く、初めてスキーに乗って二十八日目に一級を

取得した。銀行の本部の仕事は上司の仕事の整理とお茶くみ、職場の花といわれる退屈な仕事をし、四〇五年すれば、寿退職を期待される女の世界が虚しかった。

このたび東京オリンピックを観て、一人遊びのスケートボードこそが私の世界と感じた。原発爆発の放射能汚染を、アンダーコントロールと言い、フクシマを隠し無かったことにしてオリンピックを招致し、更にコロナ禍の猛反対の中での開催強行。かつて戦地慰問に駆り出された文化人たちは、戦後戦争協力者といわれ、人生の汚点を抱えた。オリンピックの選手たちの、そこに今ある姿に感情移入している私も、反対を叫び通している人たちからみればやはり戦争協力者につながるのだろうか。

梅津純子

◆世に明るい話題少なしいえど、短歌にしようと考えるとどんなテーマでも暗くなり、否が応でも悲観的な自分に気づいてしまいます。実生活は楽観に流れるのに、この矛盾。比較するものでもありませんが、パラ選手の逞しさと突き抜け感に勇気をもらえた気がします。

大橋千佳子

◆駅にいかなくなつて久しい。駅がひどく遠くに感じられるようになった。駅までの（路線）バスにもならない。先日、たまたま歩いていて、駅の近くになった。橋上駅のそのあしもとになる歩き。駅には、電車が出入りしていた。それが、遠い過去のことのようにもみえた。東京とつながる

駅だが。近くのシネコンにもいく。歌会にも通った。エッセイの会にも。そういうことが一切なくなった。駅がよそよそしく、怖いようなものになっていた。どういう生活をしているか、しれるようだった。

小野澤繁雄

◆9月9日に中学生の稲刈りが終わった。自分たちの給食に出る米を中学生自身が刈っている。とてつもなく手が掛かる米作りのおいしい部分だけ体験させていいのかという議論もなされたが、しないよりはした方がいい。学校での勉強よりは人気なのだ。ジャージをどろどろに汚しながらの稲刈り。泥にまみれる経験など一生のうち最後の経験になるのでは…などと思ってしまった稲刈り体験であった。「泥跳ねし後も笑顔の刈田かな」

神村ふじを

◆T O K Y O 2 0 2 0 オリンピックとパラリンピックが無事終わった。コロナ禍パンデミックの最中に完了したのであるから、五輪史上のレジェンドの一つとして語り継がれるかもしれない。多くの感動ばかりでなく教訓も遺してくれた。ポストコロナの新しい世界の指針となるといいと思う。

私は、新型コロナとその変種の災禍に、不条理に対する先人の思索を辿りたいと思い、カフカ文学から江戸人の機知に至るまで本棚の所蔵の古本を手にした。その中に旧新約聖書のお厚い一冊があった。新約の黙示録を読むつもりであったが、旧約聖書の創世記に目が留まってしまった。差別

のない世界を望むが、まずは、戦争のない世界の実現を望むべきだと思う。

河村郁子

◆この夏は、世界のあちこちが異常気象に見舞われた。スイスでも、今年の夏は特別だった。大雨が降って、川が溢れたり湖の水かさが増して洪水になったり。例年に比べて、晴天の日が少なく肌寒く、夏らしい日がほとんどなかった。南ヨーロッパでは、猛暑で山火事が猛威を振るった。実りの秋と言うが、今年は作物にも影響が出るのではと懸念している。一方、コロナ禍もまだまだ収束には遠い。フランスなどではすでに導入された、レストランや劇場・映画館などに入る際のワクチン証明書提示も検討されているところだ。ただ、スイスは民主主義が徹底している国なので、状況との兼ね合いを慎重に見極めていようである。いずれにしても、秋になって再び感染が広がらないことを願うばかりだ。

ギンジック恭子

◆八月七日、葉山の自然を守る会の仲間がトビタケ採りに山に向かった。車で白鷹町内の黒鴨林道を走っていると、終点近くになってから異様な光景が。法面に除草剤が撒かれ草が枯れているのだ。峠の駐車場はいつもならスキが生い茂っているのに、その形跡もない。ここから南方は一九八六年から四年かけて造られた一・六キロの大規模林道だ。国が計画した道路で、私たちが中心となった反対運動により建設が中止された。この先に道はない。町の管理となったこの舗装道路

の両側の草も赤茶色に枯れていた。誰が何のために除草剤を散布したのか、私たちは町長に対して公開質問状を送った。後日回答があり、町の農林課が維持管理のため、除草剤ラウンドアップを約七〇〇リットル散布したという。驚いたことに、山形森林管理署に除草剤の使用制限の規定はないのだと。一带は朝日山地森林生態系保護地域に隣接している。私たちが管轄の東北森林管理局に問い合わせたところ、除草剤を撒くなどあつてはならないとの返答だった。八月二十八日、私たち五人はジープと軽トラックに分乗し、数年整備されていないデコボコの黒鴨林道十六キロを片道一時間半かけて走り、現地を視察した。何と醜く無惨な眺めであることか。これ以上の暴挙を許してはならない。

新野祐子

◆友だちに誘われて、八ヶ岳高原の友だちの別荘に一週間ほど滞在した。標高何メートルかは忘れてしまったが、ともかく涼しい。お天気になるければ真夏でも暖房が必要になるとか。それに緑が多いのもうれしい。だが夜は、生ごみを探しに猪が庭に来ることがあるので外に出ないように、と言われ、これには驚いてしまった。

松井淑子

